

ダウトゲーム

五十嵐貴久

第二回

6

翌日は日曜だったが、定時に署に出ると、係長の藤元ふじもとが席にいた。お疲れ、と藤元が笑いかけた。

「昨日は悪かったな。自分たちで何とかなりますと岩上いわがみから連絡が入ったんで、甘えさせてもらった。娘の試合があつてな……」

「いえ、大丈夫ですよ。単なる自殺ですし……どうでした？ 里砂りさちゃん、勝ちました？」

藤元の一人娘、里砂は高校二年生だ。所属している剣道部でキャプテンを務めている。藤元の親ばかぶりは、部署を越えて署内の誰もが知っていた。

勝ったよ、と藤元がVサインを出した。

「地区予選だけど、団体戦も個人戦も優勝した。自分の娘ながら惚れ惚れしたね。きれいな飛び込み面決めてさ……どうしてオリンピックほクに剣道がないのかねえ。メダル候補ぐらいには……おはよう、安さやす

ん」

入ってきたのは鑑識の安川係長だった。藤元より二年、年次が上だ。

働かせるよなあと唇を尖らせた安川が、空いていた椅子に腰を下ろした。お茶でも、と言った志郎に、いらんよ、としかめっ面のまま数枚のレポート用紙を藤元のデスクに置いた。

どこからどう見ても自殺だ、と安川が結論から言った。

「高村良雄は四十歳、身長百七十八センチ、体重八十キロ。完全な健康体だった。筋肉質だし、力も強かっただろう。外傷、抵抗痕はない。自分でやったんじゃないや、あんなにきれいに首はくくれんよ。ロープと首の位置関係も典型的な自殺者のそれだ。おかしなところは何もない。間違いなく自殺だ」

確かですかと志郎が言ったのは、昨晚署に来た春野博美のことが頭にあったからだ。

「例えばですが、数人掛りで押さえ込んで、絞殺してから風呂場に吊るしたとか……」

「十人のプロレスラーに襲われたって、人間なら抵抗するもんだ。だが、室内にそんな痕跡はなかった。きれいなもんだよ」

そうか、と藤元が言った。今の四十男つてのはみんなあんな感じか、と安川が首を捻った。

「一人暮らしなのに、部屋がきちんと整頓されてた。そういう奴だから、結婚しないでいいってことか？」

「何か不審な点はなかったんですか」

志郎は安川の顔色を窺うかがった。署内でもうるさ方として知られている男だ。

余計なことは聞くなと怒られるかもしれないが、ないね、と舌打ちされただけで済んだ。

「鍵も閉まっていた。遺書もある。自殺だ」

「こいつは検死医の報告書か？」藤元がレポート用紙をめくった。

「ふうん……おっしゃる通り、外傷はない。首の骨が折れていたのは、首吊りなら当然だな」

「そういうこと。夜中に叩き起こされて現場に向かったが、結局のところ自殺だった。しょうがない、そんなこともあるさ……鑑識からは以上だ」

「安さん、日曜は始まったばかりじゃないの」帰りなさいってと藤元が微笑んだ。「孫と遊ぶ時間はあるからさ」

そうだな、と安川が腰を上げた。係長、と志郎は言った。

「片山興産かたやまの総務部長が、高村さんの遺体を引き取りたいと申し出ています。近い親戚がいなくてか、会社で葬儀を執り行いたいと言ってるんですが、どうしますか？」

「会社はそう言うだろうな。だが、うちだけで決められることじゃない」上の意見も聞かなきゃならん、と藤元が首を傾げた。「安さんの方はどうかね？」

こっちは構わんよ、と安川が立ったまま答えた。

「やることは全部終わった。むしろ引き取ってもらいたいぐらいだ」明日でいいだろう、と藤元が手の中のスマホを指で探った。

「自殺なら、上も止める理由はない。両親が亡くなってるそうだが、親戚はいるのか？ そこだけ確認しておいてくれ。先方だって別に焦っちゃいないんだろ？」

志郎がうなずいた時、おはようございます、と紀子ののりこ明るい声がした。

「安川さん、お疲れさまです」

「紀ちゃん、刑事係なんかいつまでもいちゃいかんよ」安川がにやりと笑った。「こんなどこにいたら、縁遠くなるだけだ」

「考えておきます……係長、おはようございます。挨拶ぐらいしてあいさつくださいよ」

すまん、と藤元がスマホをデスクに置いた。

「ちよつと娘にな……ラインを送ってたんだ。この前フリック入力を教わってな」

お前さんがねえ、と安川が腕を組んだ。

「ちよつと前まで、ろくにメールも打てなかっただろうに。人間、
進歩するよなあ」

「人聞きの悪いことを……メールぐらいは出来ますよ。だけど、ラ
インはタダだからって里砂に言われたんです。それなら返事してあ
げるって。そう言われりゃ、やるしかないでしょう。最近の若い子
は器用で、メッセージを打つのも早い。やってみたら、案外簡単に

――

「音声入力すりゃあいいだろう」

「何ですか、それ」

真顔で藤元が尋ねた。五十歳になったばかりだが、デジタル機器
に弱いところがある。もういい、と苦笑した安川が、鬼刑事が仏に
なったかただけ言って、刑事部屋を出て行った。

あの人にはは言われたくない、と藤元が閉まったドアに目をや
った。

「仕事仕事で毎日夜中まで残っていた人が、孫ができたら一目散で
帰るようになった。紀子にも優しくなっただろ？ 前は当たりがき
つかったが……お前たちも報告書を読んでおけよ。明日、課長と話
して判断するが、自殺で決まりだろう。橋口、遺体引取りの件話し
ておく。決まったら知らせる」

「お願いします」

「高村のマンションだが、伝染病騒ぎは収まったのか？ まだ建物は封鎖されたままか？」

「確認します。昨夜の段階では、封鎖が続いていましたが」

同僚の刑事たちが現場に残って聞き込みを続けているので、応援に行くつもりだった。

「後は頼む。紀子、お兄ちゃんを手伝ってやれ」

戻れ、と手を振った藤元がまたスマホをいじり始めた。

やっぱり自殺なんだ、と紀子が自分の席に座った。そう言っただろう、と志郎はうなずいた。

「誰がどう見たって自殺だ。報告書をまとめよう。終わったら現場に戻って、南部たちと合流する」

了解、とうなずいた紀子が、インコのことなんだけど、と志郎を見た。

「インコ？」

「どっかの研究所で調べてるんだよね？ ウイルスに感染してるかもしれないってこと？ まさか、解剖かいぼうなんてしないよね」

「さすがにそれはないだろう。ただ、どうなるんだろうな。飼い主が自殺したら、誰が面倒を見るんだ？」

昨日の春野さんって人じゃないの、と紀子が言った。

「ねえ、インコが入っていた鳥籠の写真見て思ったんだけど、餌箱えさばこが

空だった。大丈夫なのかな。飢え死にとかしない？」

「餌ぐらい誰かがあげてるって。そんなことはいいから、仕事をしてくれ。現場に行ってる連中から報告が上がってるだろ？ 係長に伝えておかないと後が面倒だ」

紀子がパソコンを立ち上げた。朝は始まったばかりだった。

7

昼過ぎ、志郎は紀子と共に高村のマンションへ向かった。封鎖が解除され、エントランスのドアが開いたままになっている。岩上は現場を離れていたが、南部なんぶが代行して捜査の指揮を執っていた。

管理会社が来てたんだ、と高村の部屋で南部が煙草たばこをくわえたまま言った。

「確認したが、鍵は間違いないかかっていた。不動産屋の話では、高村はスペアキーを作っていなかったようだ。ピッキングに強いロータリー・シリンダー錠で、外部から誰かが侵入したとは考えにくい」

プロでも開けるのに数分はかかるとうなずいた志郎に、仮にだが、と南部が先を続けた。

「誰かが鍵穴に何か突っ込んでガチャガチャやってるのを見たら、どんなに鈍い奴でもおかしいと思うだろう。そんなリスクを冒す理おか

由はない。高村本人が中から施錠したんだ。それだけ考えても、自殺で間違いない」

「他には何か言ってたか？」

「築二十年だそうだ。メンテは定期的に行っているが、古いことは古い。高村が入居したのは五年前で、会社名義で借りていた。家賃も会社が払っている」

「らしいな。そう聞いてる」

志郎は昨夜遅く署に来た春野博美の話をした。そうか、と南部がうなずいた。

「高村と親しくしている住人はいなかったが、すれ違えば挨拶あいさつはしていたそうだ。腰の低い、いい人だったとみんな言ってる。驚いたよ、自殺なんかするようには見えなかったってな」

「何か物音を聞いたり、争ってるような音とかは？」

紀子の問いに、殺しだったらよかったと思ってるのか、と志郎は苦笑した。両隣の部屋に確認した、と南部が言った。

「古いが、造りのしっかりした建物で、壁も防音だ。高村さんは静かな人だった、と住人が話していたが、夜八時過ぎに話し声を聞いたと右隣の部屋のオバサンが言ってた」

「話し声？」

「はつきりしたことはわからない。大声ではなく、気づいたら聞こ

えなくなっていたそうさ。テレビでも見ていたんじゃないか？」

残念だったな、と肩を軽く突いた志郎に、高村さんの声なのかな、

と紀子が左右の壁に目を向けた。断言はできないとき、と南部が言った。

「電話で話してたのかもしれない。高村の部屋を訪れる者はほとんどいなかったが、時々、女性が来ていた。住人の何人かが見ている」
交際していた春野さんだろう、と志郎は言った。

「はっきり聞いていないが、週に一、二度は来てたんじゃないか？
そんな感じだった」

「^や痩せてて背が高い女か？ 見た連中はそう言ってたよ。美人だったらしいが、そんな相手がいるなら自殺することはないだろうに。
恋人にも言えない悩みを抱えてたってことかもな」

「そうなんだろう」

「まだ住人全員に話を聞いたわけじゃない。もう少し調べてみるつもりだ。何かわかれば、また知らせるよ」

他の刑事たち、そして病院の関係者や封鎖のために動員された所轄しよかつの警察官にも話を聞いたが、現場に不審なところふしんはないと全員が口を揃えた。聞き込みに加わるつもりだったが、手は足りているという。一度署に戻ると南部に断って、部屋を出た。

エレベーターで一階まで降りるまで、紀子は何も言わなかった。

変わっていくデジタルの階数表示を見つめているだけだ。

今日は早めに帰ろう、と志郎はその肩を叩いた。

8

月曜日の朝、藤元の指示で片山興産に向かった。詳しい事情を聞かなければならない。志郎は紀子と品川から山手線で新宿に出た。

朝の会議で藤元が上司の課長と話し、高村の遺体は片山興産が引き取ることになった。ただ、法律上の手続きを踏まなければならぬいし、上に提出する書類もある。

高村の遺体は警察病院で保管しているが、そのまま片山興産という会社に運ぶわけにもいかなかった。

今回のようなケースは珍しくない。家族、あるいは会社が死者を悼むのは当然だろう。

ただ、藤元が片山興産へ行けと命じたのは、他に理由があった。自殺の理由として、パワハラが考えられたためだ。その場合、違う問題が出てくると志郎もわかっていた。

総務部長の桑山くわやまに連絡を取り、今からお伺いしますと伝えた。自分が品川へ伺いますと桑山が言ったが、会社へ行かなければわからないこともあるだろう。

姫原村ひめはらむらに鉄道の駅はなかった。一番近いのは隣接するあきる野市

の秋川あみがわ駅だ。

桑山の名刺にあった住所を検索すると、秋川から三十分ほどバスに乗り、更に停留所から徒歩で二十分以上かかることがわかった。

新宿で中央線に乗り換え、はいじま 拝島からいつかいちせん 五日市線で秋川駅へ向かった。乗り継ぎがうまくいっても二時間弱かかる。東京とは思えないと愚痴をこぼしたが、紀子は取り合わなかった。

午前中の下り電車の車内は空すいていた。座れたからよかったけど、と志郎は紀子に話しかけた。

「品川からだったら、新幹線で名古屋まで行く方が早いんじゃないか？ どうなってんだよ」

しょうがないじゃない、と紀子が苦笑した。言っても始まらないのは、その通りだ。

乗った中央線が通勤快速だったため、拝島まで四十分ほどで着いたが、五日市線に乗り換えなければならない。

志郎も紀子も下町の深川ふかがわ生まれ、深川育ちなので、土地勘はない。五日市線の電車に乗ること自体初めてだった。

ちよつとした遠足だな、と志郎は言った。接続が悪く、二十分ほどホームで待つと、ようやく電車が入ってきた。

本庁に行きたいな、と紀子が口を開いたのは電車が動き出した時だった。

「お兄ちゃんは追い出されたけど、やっぱり本庁勤務じゃないと……所轄にいと、ぬるま湯に浸かってるみたいで……」

追い出されたって言い方はないだろう、と志郎は頭を掻いた。

「別にいいじゃないか。本庁に行けば面倒事の方が多くなる。ノルマだって今までの比じゃない。お前みたいなんびり屋には務まらないよ」

お兄ちゃんでも務まったわけじゃない、と紀子が片目をつぶった。

「だったらあたしでも大丈夫なんじゃないかなって」

おれは品川に移ってよかったと思ってる、と志郎は行った。

「左遷させんだって言う奴もいるけど、ちよつと疲れていたのも本当なんだ。本庁は人間関係もシビアだしな。キャリアとノンキャリアがどうこうって話じゃなくて、おれみたいな所轄上がりは、どうしたつて下に見られる。それより、所轄の方が働いていて気が楽だ」

向上心がないよね、と紀子が呆あきれたように言った。

「それって、刑事としてどうなの？ 難事件を解決したいとか、そういうのないわけ？ ノンキャリアだって一課長にはなれるんじゃない？」

無理だよ、と志郎は腕を組んだ。

「おれみたいな男が一課長なんてあり得ない。そりゃ、昇進はしたいよ？ いつまでも巡查長っていうのもカッコ悪いだろ。その辺は

考えてるんだよ。昇任試験も受けてるしさ」

「残念でしたね、二年連続で落ちて……そんなに難しいの？」

「ご存じの通り、おれは勉強が苦手だからさ。一次の筆記試験がなあ……去年は惜しかった。何とか筆記と論文は通ったけど、口頭試問でミスった。警察官以外で拳銃けんじゆうの携帯許可を持つ者は誰かかっていきなり聞かれて、あそこから頭が真っ白になった。もうちよつと簡単な質問だったら、落ち着いて考えることもできたんだけど……」

自衛官、海上保安官、税関職員、入国警備官、刑務官、麻薬取締官、と紀子が指を折った。詳しいな、と志郎は目を見開いた。

「どうしてそんなことを知ってるんだ？」

「あたしだって巡査部長ぐらいにはなりたい」当然でしょ、と紀子が肩をすくめた。「お兄ちゃんみたいに適当に勉強してるわけじゃない。女が刑事として上へ行くためには、男の三倍努力しなきゃならない。ゴメンね、たぶんあたしの方が先に巡査部長になると思う。でも安心して、偉くなっても兄と妹の関係は変わらない。よろしく頼むよ橋口巡査長って、にっこり笑って命令するから」

変わってるじゃないか、と志郎は肩をすくめた。

「とはいえない話じゃない。お前は昔から勉強好きだったからな。

その時はよろしく頼むよ」

志郎は一浪していたが、紀子はストレートで大学に受かっている。

紀子が先に昇進したら面子丸つぶれだ、と窓外を流れる風景に目をやりながら、志郎はため息をついた。

9

秋川駅で改めて片山興産の場所をタクシーの運転手に聞くと、徒歩だと一時間近くかかるのがわかった。しかも、途中からは山道だという。仕方なく、タクシーで向かうことにした。

窓越しに外を見ていると、駅周辺はともかく、すぐに長閑な田園風景が広がった。タクシーはかなりの速度で走っているが、通行人はほとんどいなかった。

三十分ほど走ると、いきなり道が悪くなった。急な上り坂は未舗装の土の道だ。

フロントガラスの向こうに山が見える。木々の緑が美しい。

道の勾配がどんどん急になり、走るにつれ山が大きくなっていく。東京は広いな、と志郎は紀子の脇腹を肘でついた。

「そうだね。空気もさわやかな感じがする」

あれは婀娜山だよ、と運転手が前を指さした。

「そんなに高くはないけど、猪とか出るからさ、わたしら地元の間人もめったに登らない。何にもないしね」

車が大きなカーブを曲がると、大きな建物が立っていた。周りに

は何もない。奥には森が広がっている。

あれが片山興産本社、と運転手が言った。

「でかいでしょ」

「何でこんな不便なところにあるんだ？ どうやって通勤するんだろう」

車じゃないの、と紀子が窓の外を指さした。

「あそこに駐車場があるじゃない」

「土地が広いもんな。停めるスペースはいくらでもあるだろう」志郎はタクシーを降りた。「だけど、あの総務部長は社員数六百人と言った。六百台停めるわけにはいかないんじゃないか？」

正面に頑丈そうな鉄の門があった。建物自体はかなり老朽化ろうきゆうかしている。木造で、お世辞にも立派とは言えない。

元は別の名前だったみたい、と紀子が言った。

「ネットで調べただけど、六年前に社名変更してるの。それまでは北島建設きたじまっていう名前だった。同じ建設業には変わらないんだけど」

「社員は建築現場に直行することが多いとか言ってたよな。都心にオフィスを構えるより、家賃がかからないってことか……とにかく行こう」

門の脇に、片山興産株式会社という銅製のプレートがかかっている

る。その下にインターフォンがあった。

門自体は鉄の扉で閉ざされている。あまり開放的な雰囲気ではない。ボタンを押すと、はい、と男の声が出た。

「すいません、品川桜署の橋口と申します。桑山総務部長と面会の約束をしているんですが」

インターフォンがノイズと共に切れ、同時に鉄の扉がゆっくりと開き始めた。正面にスーツを着た背の高い男が二人立っていた。

品川桜署の橋口ですと警察手帳を見せると、二人が面倒くさそうに小さくうなずいた。刑事はどこでもそんな扱いだ。

右側の短髪の男がポケットから携帯電話を取り出し、橋口刑事ですと言った。もう一人の三十代の男が先に立って建物の中へ入った。

セキュリティは厳重なようだ、と志郎は思った。最近はこの会社でもそうだが、姫原村の建設会社に押し入ってくる泥棒がいるだろうか、と苦笑が漏れた。

中は静かだった。暗い廊下が続いているだけで、人の気配はない。四階建てだが、エレベーターはなかった。

二人の男に前後を挟まれる形で三階へ上がった。踊り場にある窓から外が見える。十メートルほど離れたところに、同じ造りの建物が立っていた。

「あれは片山興産の別棟ですか？」

志郎の問いに、男がうなずいた。本社の裏に広い土地があり、更に裏手の山にかけて敷地が広がっている。整地こそされていないが、途方もなく広い。

全体の面積は東京ドーム数個分ほどあるだろう。敷地の奥にも別の建物があるが、窓からでは一部しか見えなかった。

三階の廊下を進むと、総務部とプレートのかかった部屋があった。男たちに続いて中へ入った。

フロアの面積は広がったが、その割に社員数は少ない。数十個のデスクが並んでいたが、座っているのは四、五人ほどだ。

全員がパソコンを覗き込んでいる。入ってきた志郎たちに目をやったが、反応はそれだけだった。

「ご苦労さまです」

デスクに座っていた桑山が頭を下げると、二人の男がフロアを出て行く。わざわざすみません、と桑山が奥へ向かった。

「どうぞこちらへ。会議室でお話しできればと」

うなずいた志郎の前で、桑山がドアを開けた。安っぽい長机が四つ、パイプ椅子が十数脚ほど並んでいる。どこでも会議室はこんなものだろう。

「お座りください。すいません、片付いてなくて。どうも建設業界というのは、そういうことに気が廻らないと言いますか……」

「とんでもありません……大きな会社ですね」

「建設業というのは人数が必要なものですからね。驚かれたんじやありませんか？　こんな辺鄙へんびなところに、どうして本社があるのかって」

まあそうです、と志郎は苦笑した。実は便利でして、と桑山が椅子に腰を下ろした。

「うちは資材管理を全部ここでやってるんです。多摩地区の西側が主なテリトリーなので、都心に本社を置くメリットはありません。物流の問題もあるので、土地が広くないといろいろ難しく……花より実を取るといいますか、正直なところ、土地代もかなり安いですし」

「そうですね」

「山ですからねえ。裏手の山もうちが買ったんですが、二束三文とほまさにこれだなと……山を切り拓ひらいて整地するのは、うちの本業ですよ。作業員もいるし重機だってありますから、ランニングコストを大幅さくげんに削減することができました。経営面で考えると、いいことづくめなんですよ」

高村部長の件ですが、と紀子が体を前に傾けた。

「自殺というのが警察の結論です」

「それは……そうですか」高村がねえ、と桑山が顔をしかめた。「今

後、弊社としてはどうすればよろしいのでしょうか？」

先日桑山さんがおっしゃっていたように、遺体は会社で引き取っていた方がいいかと思っております、と志郎は言った。

「もちろん、ご親戚がいらっしゃるでしょうから、その辺りは会社とのご相談になるでしょう。ただ、警察には民事不介入の原則があるので、判断はお任せします」

「高村部長が提出していた書類を調べて、九州に叔父がいることがわかりました」桑山が持っていたファイルを開いた。「昨日、わたしから連絡を入れました。熊本にお住まいで、もう八十歳だとか……驚いておりましたが、足が不自由ということもあって東京には行けないので、すべて任せたいとおっしゃっていました。その方がよろしいかと、わたしも考えています」

「では、手配していただけますか？ 現在、遺体が安置されているのはこちらの病院です」志郎は連絡先の記された数枚の書類を渡した。「連絡済みですので、どのような形で引き取るか相談していただければと。一般的には葬儀会社を間に入れることが多いようです」

「そうしましょう。いろいろご面倒おかけして申し訳ないですね」

「いえ、とんでもありません。お悔やみを申し上げます」いくつか確認させてください、と志郎は桑山に目を向けた。「自殺の動機について、何か心当たりはありませんか？」

「それは……先日申し上げた以上のことは、何もないですね」

「どんな理由で自殺されたのか、本人しかわからないというのはその通りだと思います。とはいえ、警察は役所ですから、書類に不備があると差し戻されたり、上がるさいんです」

「わかりますよ」

「すべてきちんと説明できるとは思っていません。衝動的に自殺を図る人もいます。同じ会社に勤めていても、何に悩んでいたのかはわからないかもしれません。ですが、理由不明の報告書を上げるわけにもいかなくて……詳しい話をお聞かせ願えませんか？」

「もちろんです。協力できることはしたいと考えています」

電話でもお願いしましたが、と紀子が横から言った。

「同じ営業部の方にお話を伺いたいです。いらつしやいますか？」

「申し訳ありません、ご事情はよくわかりますし、そのつもりだったので、仕事の都合で営業部の社員が出払っております……」

すみません、と桑山が頭を深々と下げた。全員ですかと紀子が聞くと、そうなんですよ、と渋い顔になった。

「ちょうど新規の工事が三カ所で始まったところだったんです。うちぐらいの規模の会社ですと、営業マンが作業員と共に現場へ行くのはよくあることなんです。お盆休みも返上ですよ。タイミングが合わなくて何と申し上げていいのやら……ただ、社長の真田が社に

さなだ

おりますので、お話しいただければと。真田は営業役員を兼任しておりますので、高村にとって直属の上司ということになりますし、関係も密でした。わたしより事情に詳しいはずです」

社長室で待つておりますので、と桑山が腰を浮かせた。社長で直属の上司なら、高村のことをよく知っているだろう。それでは、と志郎は立ち上がった。

六百人規模の会社だと、部署が違えば話す機会もほとんどなかっただろう。高村とはそれほど親しくなかった、と桑山も言っている。自殺の理由については、真田に聞いた方が早いという判断があった。会議室を出て階段に向かった。エレベーターがなくて申し訳ありません、と桑山が上を指さした。

「何しろ建物が古いので……四十年ほど前に建てられていますが、当時はエレベーターの設置が義務づけられていなかったそうです」

四階フロアの左側ドアに、営業部のプレートがかかっていた。広いスペースに三、四十ほどの席があったが、誰もいない。社員は出払っているようだ。

フロアに入った桑山がまっすぐ進み、奥の小部屋の薄い扉をノックした。社長室のようだが、表示は何もない。

どうぞ、という低い声が聞こえた。扉を開くと、百八十センチを優に越える長身の痩せた男がデスクから立ち上がって頭を下げた。

社長の真田です、とまっすぐ手を伸ばした。

「このたびは大変ご迷惑をおかけして、誠にすみません」

とんでもありませんと言いながら志郎は真田の手を握った。髪の毛が短く、目に力がある。削げた頬ほおと顎あごから、意志の強さが感じられた。

端正という、少し違うかもしれない。精神力に溢あふれた表情だった。

スーツの下の体が引き締まっている。アスリートと僧侶そうりよが肉体の中で混在しているような男だ。

こちらへ、と真田がソファを指した。業務用なのか、かなり古かった。

わざわざお出でいただきました、と真田が頭を深く下げた。

「ですが、高村にも事情があったのでしよう。ご理解ください」
隣に座った桑山も同じように頭を下げた。志郎は改めて真田を見つめた。

桑山が四十代半ばなのは、誰でもわかるだろう。肌艶はだつやもくすんでいるし、髪の毛もかなり薄い。

だが、真田は違った。表情も若々しく、整った顔には皺しわひとつもない。四十歳どころか、自分と同じぐらいではないか、という印象が志郎にはあった。

視線で気づいたのか、よく言われます、と真田が短く刈った前髪に触れた。

「桑山部長は四十三だっけ？」

「四です」

「そうか、私より二つ下だったね……今年で四十六なんですよ。年齢を言うと驚かれます」

「とてもそうは見えません。失礼かもしれませんが、三十代かと……」

「私も困ってるんですよ」銀行が信用してくれないんです、と真田が憂鬱そうに言った。「同業者との会合でも、何となく下に見られません。世間的には、若々しくていいじゃないかという話になるかもしれませんが、ビジネス上ではいろいろ難しく参ってます。軽んじられるとまでは言いませんが……」

悩みの種です、と真田が口元を歪めた。その表情にも、年齢を感じさせないものがあつた。

「それはともかく、今後もご迷惑をおかけすることになるかと思いますが、事情をご理解いただければと。よろしく願います」

発音は明晰で、論理的な話し方だった。目の輝きから、頭の回転の速さが窺われた。

四十六歳は社長として若いと言っている。にもかかわらず、六百

人の社員のトップにいるのは、有能だからだろうし、人望もあるに違いない。カリスマ性のある男だ、と志郎はうなずいた。

驚いています、と真田が口を開いた。

「まさか高村くんが自殺するとは……今も信じられません」

高村さんですが、と志郎はメモを取り出した。

「業務内容を教えてください。営業部長だったそうですが、不勉強でイメージが沸かなくて……」

土建屋ですよ、と真田が両手を広げて笑った。

「三多摩と奥多摩を中心に、一軒家でもマンションでも建てます。土地の開発や不動産売買も手掛けていますが、メインは建設業ですね。はっきり言えば、大手ゼネコンの孫請け会社です。彼らはデスクでパソコンに向かい、我々は現場で泥にまみれる。日本社会の縮図です」

「それは作業員の話ですよ？ 営業部は何をするんです？」

受注契約を取ってくるんです、と真田が説明を始めた。

「黙って座っていても、仕事は入ってきません。昔からそうですが、大手のゼネコンが仕事を作り出します。どこそこの市の一角に巨大団地を建てる、そう考えていただくと、わかりやすいかもしれません。ですが、実際に作業をするのは子会社孫会社の社員です。ゼネコンが発注し、我々が現場で建物を作る。ぼんやりしていたら、他社に

仕事を持っていかれます。こちらから積極的に大手ゼネコンを回り、情報をいち早くキャッチし、うちがやりますと手を挙げる。営業と
いうのは、そんな仕事です」

「なるほど」

「ただ、これは私の方針ですが、営業部員はデスクワークだけが仕事、というやり方をしていません。できることは部署を越えて何でもやるべきで、午前中は営業マンとして働き、午後は作業員として鉄骨を運ぶなんてこともざらです。そういうスタイルにしないと生き残れないと常々言ってますし、高村くんも同意見でした。彼は非常に優秀で、営業部長としても現場の監督としても超一流でしたよ。交渉能力もあり、統率力に優れていました。どれだけ助けてもらったかわかりません。私の右腕も同然だったんです」

真田が目をつぶった。しばらく沈黙が続いた。言葉以上に信頼していたのだろう。

残念ですと言った志郎に、悔しいですと真田が目を開いた。

「彼が自殺したのは認めざるを得ませんが、どうして相談してくれなかったのか……」

辛そうな表情が浮かんだ。おっしやる通りです、と桑山がうなずいた。

悩まれていたという話を伺いました、と紀子が真田に視線を向け

た。

「何かご存じでしょうか？」

「新規プロジェクトの件で、彼が会社の方針に反対していたのは確かです。全社一丸となって取り組むことになっていましたが、白紙にして検討し直すべきだと会議で主張したんです」

「プロジェクトといいますと、どのような？」

青梅市で大規模な再開発計画がありまして、と真田が言った。

「稀まれに見るビッグチャンスで、社としても多大なメリットがあると私は考えていたのですが、高村くんは失敗した場合のリスクを考慮すべきだという立場を取っていました。しかし、ビジネスには多かれ少なかれギャンブルの要素があります。勝負に出るべき時にリスクを考えても意味はありません。業界はサバイバルゲームなんです。どこも同じかもしれませんがね」

「社長ご自身も、プロジェクトを推進するお考えだったわけですか？」

「もちろんです。今が決断の時で、打って出なければじり貧になり、いずれは負けるだろう、と社員に話しました。高村くんは気骨きこつのある男で、納得できなければ社長の私にも正面から意見することがありました。たいしたものだと思います。そういう人間が組織には必要でしょう。それぞれが自分の信じる意見を自由に言えるようにな

ければ、健全な組織とは言えません」

社長は他の意見をよく聞く方です、と桑山が微笑んだ。

「反対者を排除するのは、ある種のパワハラでしょう。今の時代、許される話じゃありません」

仕事をしていれば意見の対立はあります、と真田がうなずいた。

「経営者側と現場の判断が違うのは、よくある話でしょう。警察もその辺の事情は同じじゃありませんか？」

そこはノーコメントで、と志郎は肩をすくめた。高村くんの意見に理があつたのは本当です、と真田が手のひらを見つめた。

「リスクがあつたのは確かで、ひとつ間違えば厄介な事態になったかもしれません。ですが、そこは考え方の違いといえますか、メリットとデメリットの計算式によるんでしょうね。私はプラスが多いと考えていましたが、彼はマイナスの方が大きいと判断したわけです。最終的に、本人の希望もあつて、プロジェクトの指揮を執る立場から降りることになりました。社員の士気というものもありますからね……断腸だんちようの思いで外しましたが、有能な男という評価は変わりません。それから何度か話し合いを続け、ようやく彼も納得してくれたんです。改めてプロジェクトリーダーに任命する予定でしたが、こんなことに……」

自殺の原因はそれでしょうかと尋ねた志郎に、本当のところは私

にもわかりませんと真田が答えた。

「彼がプロジェクトに戻ると言ったのは事実ですが、本意ではなかったのかもしれませんが。仕事、プライベート、他に理由があったとも考えられます。不確かなことを言えば、かえって迷惑をおかけすることになるでしょう」

「先ほどおっしゃっていた、リスクというのは何ですか？」

「最悪の場合、会社が倒産すると彼は考えていました」真田が淡々とした声で答えた。「その可能性がないとは言いません。ですが、リターンの方が遥かに大きいと私は思っていましたし、今も信じています。ビジネスにタイミングがあるのはおわかりですね？ 今を逃してはならない、と経営者として判断していました。そこは揺らいでいけません」

「念のためにお聞きしますが、会社の方針に反対したため、高村さんから仕事を取り上げたというようなことはありませんか？」

紀子の問いに、あるわけないでしょう、と真田が苦笑した。

「パワハラが自殺の原因だと警察が考えているのであれば、それは違います。プロジェクトから降りたのは彼が決めたことで、私がどれだけ慰留いりゆうしたか……営業部長という肩書もそのままにしています。話し合いを重ねれば、高村くんも必ずわかってくれると信じていたんです」

志郎は紀子に目を向け、小さく首を振った。真田にパワハラの意味はなかったのだろう。意見が違う者を卑劣な手段で外すような男ではない、という印象があった。

ですが、と紀子が質問を続けた。

「高村さんに結婚の約束をしている女性がいたのはご存じでしょうか？ プライベートは順調だったようです。それでも自殺したのは、やはり会社で何らかのトラブルがあったとしか……」

交際している女性のことは本人から聞いていました、と真田がうなずいた。

「あれはいつだったか、結婚の話が出ていると話していたのも覚えていきます。ただ、迷いはあつたようです。順調だというのは、相手の方の話ですよ。高村くんは結婚を考えていなかったと思えますよ。詳しく聞いてはいませんが、そのつもりはないというニュアンスで話していました」

「本当ですか？」

「何年前か前、酒の席での話ですが、結婚願望はないと彼は言っていました。未婚男性が増えているでしょう？ 彼もそうした男性の一人で、結婚できないのではなく、したくないと考えていたと思いますよ。私は結婚を勧めていたんです。彼も四十歳ですから、身を固めてもいいんじゃないかと……ですが、独身が長く続く生活のペー

スができますよね？ 彼はそれを崩すのが嫌だったんでしょ。これは憶測おくそくですが、結婚を迫られていたのではありませんか？ 男性と女性とでは、結婚について考え方が違います。高村くんは仕事のできる男でしたが、プライベートでは優柔不断な面もあったと聞いています。はつきりノーと言えなかったのではないのでしょうか」

「つまり、結婚を迫られて、それがプレッシャーになっていったと？」
私が把握している限り、と真田が言った。

「会社での問題は、彼の中でそれほど大きくなかったと思います。そうになると、プライベートに何か原因があったのではないかと……その女性に問題があったと言ってるわけじゃないんです。他にも我々の知らないトラブル、例えば借金を抱えていたり、そんなことがあったのかもしれませんが」

そこは調べるつもりです、と志郎はうなずいた。真田が言うように、博美の話は主観的なもので、高村自身がどう考えていたのかはわからない。高村に他の女性がいた可能性もあるし、それがもつれて自殺したということもないとは言えない。

統計では自殺者の動機として鬱病うつびょうが最も多い。その辺りはまだ調べていなかった。

しばらく真田と話したが、重要と思われる事実は特になかった。

桑山が時計を見る回数が増えたこともあり、いろいろありますがどうご

ございました、と志郎は礼を言った。

「お忙しいところ、時間を割いていただきまして申し訳ありません。何かあればまた連絡しますが、今日はこの辺で失礼します」

桑山さんに担当してもらいます、と真田が立ち上がった。

「高村くんには近親者がいなかったと聞いています。会社が対処すべき案件です。そこはお任せください」

差し出された手を握った時、窓の外で大きな音がした。

「今のは何ですか？」

裏の山で工事をしているんです、と真田が笑いながら答えた。

「少し手狭になってきたので、社屋を増築せざるを得なくなりましてね」

はっば 発破をかけているんですよ、と桑山が笑みを浮かべた。

「こういう時、土建業者は便利といえますか……重機がありますから、自分たちで工事ができます。経費も安く済みますし、何でも自分たちでやれるのが強みです」

そのまま社長室を出た。前に廻った桑山がドアを開けると、廊下から数人の男たちが入ってきた。

早かったな、と真田が声をかけた。

「終わったのか？」

男たちが頭を深く下げた。高校生の頃入っていた野球部のメンバ

ーを志郎は思い出した。態度がきびきびしていて、あの頃の自分たちとよく似ていた。

真田に礼を言い、一階まで階段を降りた。送りに出た桑山が、今後ともよろしくお願いします、と外の道に出るまで頭を下げ続けた。

いい会社だな、と坂道を歩きながら志郎は言った。

「なかなかあそこまできちんと対応してくれるもんじゃない。高村も同僚や社長が良い人良かったんじゃないか？」

「かもね……お兄ちゃん、ここからどうやって帰る？ 駅まで歩くつもり？」

「冗談じゃない、こんな山の中を歩いて帰るなんて……タクシーを呼ぼう」

行きのタクシーでもらった領収書を引つ張り出し、配車センターの番号を確かめた。志郎がスマホに触れると、会社ってよくわかんないな、と紀子がつぶやいた。

「何の話だ？」

「女性社員が一人もいなかった。建設会社だから？」

総務部でも他のフロアでも女性の姿を見ていなかったが、そんなものだろうと志郎は言った。

「現場仕事がメインの土建屋で、しかもこんな不便な場所にある。」

女性に向いている職場とは言えない……もしもし？ すいません、一台お願いしたいんですが」タクシー会社と電話が繋がった。「ええと、住所はですね……」

背を向けた紀子が、山が近いねと指さした。片山興産本社の前には、と志郎はスマホに向かって言った。

10

翌日から通常の仕事に戻った。所轄署の刑事課で扱う事件に大きなものはないと言っているが、小さい事件は無数にある。継続して捜査している事件もあった。

紀子と同じ部署で働いているが、担当している事件はそれぞれ違う。なるべく重ならないように、と藤元にも頼んでいた。

兄妹とはいえ、何から何まで同じだと息が詰まる。住む部屋も別々に借りているし、互いのプライバシーに干渉しないのは、兄妹の暗黙の了解だった。

日曜の夜、泉岳寺近くの自宅マンションにいた志郎のスマホが鳴った。画面に紀子という文字が浮かんでいた。

「どうした、こんな時間に」時計を見ると、十一時を廻っていた。

「今、どこにいる？」

「どこって、部屋よ」紀子が小さく笑った。「お兄ちゃんこそ、どこ

なの？」

部屋だよ、と志郎は答えた。夜食用のカップ麺に湯を注いでから、
ちょうど三分経っていた。

「お前、金曜署にいなかったらどう。どこに行ってた？ 仕事か？」

「何よ、いきなり。仕事に決まってるじゃない。誰かさんと違って、
サボったりしません。一日出たり入ったりで、お兄ちゃんとはすれ
違いだったけど」

「仕事はいいが、働き過ぎはまずいぞ」少し伸びた麺をすすりなが
ら志郎は言った。「過労死なんかされたら、死んだオヤジとオフクロ
に何て言えばいいんだ？」

「大げさだよね……ねえ、何か食べながら話すの止めてよ。あのね、
木曜の夜、お兄ちゃんがたかなわ高輪の空き巣の件で出た時、春野さんが
また署に来たの」

「春野？ ああ、高村の彼女か」

「やっぱり高村さんが自殺したとは思えないって。理由がないって
言うの」

「彼女はそう言うしかないだろう」

「うん。金曜から今日にかけて、ちょっと調べてみたの。それで、
いくつかわかったことがあって……」

「金曜から？ 土日も？ 何でそんな——」

気になったから、と紀子が答えた。そういう性格は損するぞ、と志郎はスープをひと口飲んだ。話を聞いて、と紀子が声を高くした。

「高村さんのマンションに行ったの。事情を説明して、隣の部屋に入れてもらった。音が聞こえるかどうか、確かめようと思ったの。話し声がしたとか、そんな証言があつたでしょ？」

「覚えてる」

「高村さんの部屋で何か喋しゃべってくださいってお願いしたら、普通の声だと何も聞こえなかったの。叫ぶとまでは言わないけど、かなり大きな声を出さないと無理なのがわかった」

「マンションだからな」

「隣の住人が音を聞いたのは夜八時過ぎだった。あのマンションのエントランスに防犯カメラはないけど、エレベーターにはついてるって知ってた？ 警備会社と直通になって、閉じ込められた時に助けを呼べるようになってるの」

だからお前はエレベーターで上を見てたのか、と志郎は言った。

「そうだった。カメラのことは南部も言ってたな」

ひとつ息を吐いた紀子が話を続けた。

「警備会社に行って、保管されていた一週間分の画像を見たの。事件の当日七時五十一分に五人の男がエレベーターに乗って、四階で降りてた」

「お前、そんなに暇なのか？ 他に仕事は？」

いいから聞いて、と紀子が何かを叩く音がした。

「男たちは全員作業帽をかぶっていて、顔は見えなかったけど、背格好はわかった。あのマンションの住人じゃないし、四階に住んでいる全員に確認したけど、どの部屋にも行ってなかった」

「引越してもあつたんじゃないのか？」

「夜八時に？ そんなわけないでしょ。宅配業者でもない。四階で降りて、他のフロアには行ってない。つまり、五人の男たちは高村さんの部屋に行ったことになる」

「だから？」

だからって言われても、と紀子が苦笑した。

「それはわからないけど……もうひとつ、鍵のことも調べた。最新式だけど、専門業者ならコピーは作れるそうよ。ピッキングで開けることも、できないわけじゃないの」

「高村は自殺だよ。遺書だつてあつたんだぜ。間違いないって」

「パソコンにね。でもあんなの、誰にだつて打てる。本人が書いたかどうかはわからないでしょ？ パソコンも改めて調べてみた。デスクトップはきれいで、仕事関係のファイルがいくつか残ってただけ。他には何もなかった。写真や動画もよ？ 変だと思わない？」

「おれもそうだけど、パソコンの扱いが苦手な奴はどこにでもいる。」

写真の取り込み方がわからないとかさ、そういうことかもしれない。十代二十代とは違う。高村の年齢だと、まだ学校にパソコンの授業はなかったはずだ」

誰かがデータを消したような感じがするの、と紀子が声を潜めた。

「現場に残っていた本人の携帯電話のことは聞いた？ 会社関係の電話番号はあったけど、友達とか親類とか、そういうのは何もなかったそうよ」

何がそんなに気になるんだ、と志郎はカップ麺を脇に置いた。

「友達がいらない奴なんて、いくらでもいる。高村は仕事一筋の会社人間だったんだ。プライベートが二の次になるのは仕方ないだろう」

「熊本に叔父さんがいるんだよね？ でも、その番号もなかった。それっておかしくない？」

「そういう奴だっているさ」

「部屋を調べた直井なおいさんと矢野やのくんのに話を聞いた」紀子が同僚の刑事の名前を言った。「何も不審な物はなかったけど、違和感があったと話してた。四十男の一人暮らしにしては片付き過ぎてるって思ったって」

「直井と矢野？ あいつらはそもそもがだらしがないんだよ。世の中にはちゃんとした男も大勢いるし、高村もそうだったんだろう」

「かもしれないけど……」

つまりんことは止めとけ、と志郎は麵をすすった。

「自殺で処理するって決まったんだ。そりやそうさ。誰がどこから見たって自殺なんだから。首吊りだぞ？ 偽装自殺なら、鑑識だって医者だって不審な点があると報告する。もつと科学捜査を信用しろよ」

そうなんだけど、と紀子が言った。

「ただ、春野さんが言ってるのもわからなくないし……納得できればすぐ止める。心配しないで」

心配なんかしてない、と志郎は苦笑した。

「ただ、そこまでしつこく調べることはないだろうって——」

「インコのことかわからなくて……」

「インコ？ 高村が飼っていた鳥のことか？」

「他にもあるんだけど、それは明日にする」紀子がうなずいたのがわかった。「最近お兄ちゃんと話してなかったから、電話だけでもしておこうかって」

若い女が仕事の話ばかり、と志郎は小さく空咳をした。

「もつと大事なことがあるんじゃないか？ 南部とはどうなってる？ おれはさ——」

おやすみ、と唐突に紀子が電話を切った。愛想あいそがないよな、と志郎はスマホをテーブルに置いた。

情緒じよつじゆに欠けているし、色気もない。そこそこルックスはいいのに、男が近づいてこないのはそのためだ。

妹の心配をしている場合じゃない、と志郎は首を振った。前の恋人と別れてから、一年以上経っている。このままでは独り身が続くだろう。

「別にいいけどな」

壁に向かってつぶやいた。部屋は静かだった。

(続く)